まめまきじいさんと猿と三人娘

むかしあるところに、じいさんと三人の娘いであったとやな。じいさんが、

「山の畑さいって豆まいでくるなァ」

っていって、豆、

「ひと粒　千粒

ひと粒　千粒」

ってまいでいったば、どっから出で来たやら、猿一匹出できて、

「ひと粒　ひと粒　ままなってけじゃがれ」

て言うたじお。また知らねふりして、

「ひと粒　千粒

ひと粒　千粒」

一所懸命まいでいれば、

「ひと粒　ひと粒　ままなってけじゃがれ」

じいさん豆まぐどご来て、じゃまにしていで、

「ドス猿」

てばえば、また逃げでいって、まだえっかげしまって、まだ蒔いでいれば、まだそうして邪魔して、

「ドス猿」

そしてえるもだはて、次の日行ってもそのとおりに、

「ひと粒　千粒

ひと粒　千粒」

猿こねうち蒔ぐど思って、一所懸命蒔いでいれば、まだどっからかひょこっと来て、

「ひと粒　ひと粒　ままなってけじゃがれ」

じいさん蒔ぐどご、つで歩りて来ているもだはって、

「猿、猿、そう言わねで、おれどご豆蒔かせでけれな。おめいうごどなんでも好きだものけらはでな。おれ言うごど聞で、やめでけれな」

たば、

「したら、じじ家で三人おなごっこえるもの、一人嫁っこにければえねが」

って、

「あや、あや、けでもえなやな」

じじいはそやって言ってきてしまったどやな。

そして家さ来て、なんだがじじい元気ねな、ままかねで寝でしまったど。で次の朝まに、

「じじい、まま食、おきれ」

そして一番娘行ったば、

「苦あって起きらえねぇ」

「なに苦あるや、じっこ」

ってしぇれば、

「ん、おれせ、昨日猿どごさ娘一人嫁にけるはずしてきたはで、おが行ってけらえねが」

たけ、

「猿どごさだれ嫁に行ぐもだってや。なんぼ親だって子だって、だーれ猿さ行く人あるばや」

って、デーンと枕元ふんで一番むすめ行っちまったでお。

「そだなや」

と思って、なっても飯も喉さ入らねし、ど寝でらば、こんだ二番娘来て、

「じっこ、じっこ朝間になった。飯食」

たば、
「苦あって起ぎらえねおの」
「なーに苦あるや」
「おれ昨日豆蒔きに行って、猿どごさ娘一人嫁にけるはずしてきたもの。んがえってけらえねが」
「なんぼ親だって子だって、なんぼなんだって、だれ猿どごさ嫁になって行こうばや」
また枕元デンとふんでいっちまったでおな。
「ああ、あきれでしまった。こだ三番目の娘なんとが言うやら。こまったな」
そう思っていたば、こった三番目の娘きて、
「じっこ、じっこ、朝まになった。飯食にえ、起ぎれ」
たば、
「苦あって起ぎらえねおん」
「なに苦あるや、じっこ」
「昨日、おれ猿どごさ嫁けるはずしてきたもの。一番娘にことわられた。二番娘にもことわられた。んがもことわるじゃろ。こまったな」
たば、
「ん、そんたらこと心配すな、心配すな。おれ嫁になって行くはって、心配すな。じっこ起きで飯食」
そう言って三番娘に言わえだば、じっこダックリして、
「ハァえがったな、ハァえがったな」
ってこだ起ぎて、飯食たでおな。
そしたけ、こだ嫁に行ぐごどにして、猿どごさ嫁にけでやったけ、こだ正月くるえになったでおな。そしたけ、こだまず男の子生えたでおな。そしてこだ男の子どごぶって、実家さ、じっこどごさ、孫見せに行くことになって、
「なに土産持っていけばいでろな、正月礼にな」
って、こって猿言ったば、
「おれのじっこ餅好きだはって、餅搗であんでけれ」
ってたば、したらって餅搗だでおな。猿そしたら、
「なんとして持っていけばいでろな」
「おえのじっこ、臼から離した餅だば食わねはて、臼まちからしょってあんでけれ」
そういって三番娘言ったでおな。
「んだが」
そして三番目のサクエという娘、その子どもぶって、猿、臼まちから餅しょって、ずっときたばきたば、大ぎだ川あって、川端さ大ぎだ桜の木おえでで、なんと、とてもえ花咲いだも咲いだ、とっても見事な花咲いで、こだそごさ来たば、サクエその子どものケツ、ギリッとひねって泣がせだでお。
「なして泣ぐ、なして泣ぐのだ」
たば、
「ん、この子あの花欲しどてや」
そう言ってたでお。猿は、
「なんだそれぐらい、お安いこどだ。おれとってきてやら」
と言って臼を地べたに下ろす気になったけ、サクエは、
「おれの家のじっこ、地べたさおろした臼の餅は食わね」
と言ったので、サルは仕方なく臼をしょったまま木に登って花を折るきなったけ、
「まだ上だ」
「これが」
サルが手かければ、まだまだ上だと言っているうち、臼ごど川の中

さ、ザブンと落ちでしまったど。そしてサクエは子どもを背中からおろして、
「お前も狼の子だ、一緒に行ってしまえ」
そう言って子どもどご、ザブンと川さ投げだど。そして、
「ああ、こえで親孝行した」
そう言って家さ帰って来たど。